

氏名	青木 早苗
学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第90号
学位記番号	看博第37号
学位授与年月日	令和2年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	遺伝性乳がん卵巣がん症候群である乳がん女性のセルフ・トランセンデンス Self-transcendence in Female Breast Cancer Patients with Hereditary Breast and Ovarian Cancer Syndrome
論文審査委員	主査 教授 藤田 佐和(高知県立大学) 副査 教授 長戸 和子(高知県立大学) 教授 池添 志乃(高知県立大学) 教授 森本 悦子(高知県立大学)

論文内容の要旨

本研究の目的は、遺伝性乳がん卵巣がん症候群（hereditary breast and ovarian cancer syndrome : 以下 HBOC とする）である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスはどのようなものであるかを明らかにすることである。

セルフ・トランセンデンスとは、「日常の生活の中でも起こり得るが、人が生命を脅かす体験や人生を変えるような出来事に直面したときに、自身や環境との相互作用の中で、内的・外的境界を拡張しながら今を生きる意味や新たな見地を見出していく能力」である。

研究に参加協力が得られた 30～60 歳代の HBOC である乳がん女性 13 名に対して、半構成的インタビューを実施した。データは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

本研究は、高知県立大学看護研究倫理審査委員会、並びに研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

分析の結果、HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは、以下 7 つの能力で構成された。

【生き続けるために最善の方略を模索しながら、自己内対峙する】は、生き続けるための方略を模索する過程で生じる様々な感情のゆらぎと向き合い、自分の変化に気づいたり、自己決定を肯定したりしながら、自分を諦めずに行動する能力であった。【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】は、HBOC であることは、メリット、デメリットを含め、先祖から子々孫々と継承される血縁の繋がりと感じていた自分に気づく能力であった。

【当事者として利他的になる】は、自分には当事者として、果たすべき責任と使命があると自覚し、自分の経験は自分のためだけではなく、血縁者や当事者のために活かしていきたい

と考え、行動する能力であった。【支え、支え合う存在が在ることを認識する】は、未だ希少な HBOC であることの苦悩な体験に 1 人で向き合うのではなく、支え、支え合う存在が自分には在ることを認識する能力であった。【HBOC に対する見解の多様性を受け入れる】は、HBOC に対する考え方や価値判断は自己・他者、それぞれ人により多様であると認識を変換し、他者の見解も受け入れる能力であった。【囚われていた観念から脱皮し、「HBOC」と共生する】とは、HBOC であることには抗えないが、そのことに囚われすぎず、適度な距離感を保ちながら、今までの観念を脱ぎ捨てて HBOC と共生する能力であった。【未来を惟い、今を生き抜く】とは、HBOC であることは再発や死を意識するものであるが、未来の希望も想像しながら、現時点でできることを大切に、今を生き続ける能力であった。

また、7つの能力の関係を分析した結果、HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは、【生き続けるために最善の方略を模索しながら、自己内対峙する】、【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】が相互に影響しながら、【当事者として利他的になる】能力を推進していた。そして、【当事者として利他的になる】は、【支え、支え合う存在が在ることを認識する】に影響を受けながら、【HBOC に対する見解の多様性を受け入れる】、【囚われていた観念から脱皮し、「HBOC」と共生する】、【未来を惟い、今を生き抜く】という3つの能力を推進することが明らかになった。

看護師は基本的な遺伝看護の知識を持った上で、HBOC である乳がん女性と血縁者のゆらぎを察知し、支え、支え合う存在として、まずは【生き続けるための最善の方略を模索しながら、自己内対峙する】と【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】能力を見いだす支援が重要であることが示唆された。

審査結果の要旨

遺伝性乳がん卵巣がん症候群 (hereditary breast and ovarian cancer syndrome : 以下 HBOC とする) である乳がん女性は、多発・多重性や若年性の発症、自分だけでなく血縁者の遺伝的リスクという問題など、生涯にわたり様々な問題に直面する機会が多い。しかし、現状では遺伝学検査を行うまでの診療体制や遺伝カウンセリング等の研究は進んでいるが、長期的な経過の中で、乳がん女性が HBOC である乳がんであることをどのように受け止めて乗り越えていったのか等の心理社会的変化や本人の乗り越える力、看護支援についての研究は未だ稀少である。これらを背景に青木氏は、これまでの臨床実践や患者会での活動を通して本研究の課題・研究の問いを発展させていった。

本研究の独創的な点は、Reed P G の理論を基盤にして、人がこれまでにない境遇に立たされたとき、ホメオダイナミックスの原理で現在の状況乗り越えていく能力、すなわちセルフ・トランセンデンスに着眼して、HBOC である乳がん女性のセルフ・トランセンデンスはどのようなものであるかを探究したことである。青木氏は、文献検討、セルフ・トランセンデンスの概念分析を行い、概念定義をし、そのうえで研究の枠組みを丁寧に作成している。遺伝的リスクがある患者へのアクセスが困難な中、倫理的配慮を十分行い 13 名を対象に質

的記述的研究を実施した。

本研究の結果、HBOCである乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは、【生き続けるために最善の方略を模索しながら、自己内対峙する】、【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】、【当事者として利他的になる】、【支え、支え合う存在が在ることを認識する】、【HBOCに対する見解の多様性を受け入れる】、【囚われていた観念から脱皮し、「HBOC」と共生する】、【未来を惟い、今を生き抜く】の7つのカテゴリーで説明することができ、新たな知見をもたらした。また、HBOCである乳がん女性のセルフ・トランセンデンスは、【生き続けるために最善の方略を模索しながら、自己内対峙する】、【脈々と継承される血縁の繋がりを自覚する】が相互に影響しながら、【当事者として利他的になる】能力を推進していた。そして、【当事者として利他的になる】は、【支え、支え合う存在が在ることを認識する】に影響を受けながら、【HBOCに対する見解の多様性を受け入れる】、【囚われていた観念から脱皮し、「HBOC」と共生する】、【未来を惟い、今を生き抜く】という3つの能力を推進することを新たに解明することができた。

審査の過程では、セルフ・トランセンデンスの分析過程、サブカテゴリー名、7つのカテゴリーの関係性、看護実践への活用等について質疑応答がなされ、今後の研究の発展に向けての助言を得た。本研究は、HBOCである乳がん女性のセルフ・トランセンデンスについての新知見を見出し、臨床実践の場にHBOCである乳がん女性のセルフ・トランセンデンスに着眼し高めることを目指した新たな看護実践を示唆するとともに、がん看護学、遺伝看護学分野にセルフ・トランセンデンスの概念で状況を乗り越えていく力を理解する視点や7つの能力の関連性を提示し、教育や実践に活用する礎を築いたと評価できた。

以上のことから、本審査委員会は、博士論文審査基準に基づき提出論文を審査した結果、本研究は、研究テーマの着眼点、独創性、研究へ着実な取り組み、丁寧な分析過程、論理的な論証による考察、新規性、研究成果の有効性と実践への発展性、がん看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であることを認めた。